

小野市の商工会議所の向かいに、「そろばんのまち播州小野」と書かれた、大きなそろばんのミニチュメントがある。播州そろばんは、400年以上の歴史をもつ国指定の伝統的工芸品だ。「1580(天正8)年頃、羽柴秀吉による三木城攻略の際、住民たちは難を逃れようと各地に避難しました。そのうち大津に逃れた者たちが、中国(明)から長崎を経由して大津に伝わったそろばんの製造法を習得して戻り、そろばんづくりを始めたのが、播州そろばんのルーツといわれています」と播州小野算盤工房「shin」の高山辰則さん。

播州そろばんは、玉削り(原木から玉の形をつくる)、玉仕上げ、ひごづくり(竹から玉を通すひごに加工)、組み立てという4つの分業制でつくられる。高山さんは「組み立て」の職人。「組み立て」の作業をざっとラインナップすると、①枠を加工し、②ひごを調整し、③一の玉と五の玉を仕切る中棧を加工し、④中棧にひごを打ち込み、⑤玉入れをし、⑦枠をはめ込んで調整、磨き上げる、ということになる。

このうち、たくさんの玉が入った箱のなかでザーザーと枠を動かすと、すべての桁に玉が入る「玉入れ」は、そろばんができてあがる様子がわかりやすく目に見えることから、メインの工程のように紹介されることが多い。ただ、「玉入れはそれまでの工程、その後の工程の合間のほっと一息できる工程です」と高山さんは笑う。玉入れは比較的簡単な作業で、実は「目に見えない工程ほど手間がかかるうえに、難しい」のだという。

たとえば、枠の加工。「組み立て」としてすべてのパーツが揃って、ちやっちやっちと組み立てるだけと思われがちなんですけど、まったく違うんです」といいながら見せてくれたのは、まだのこぎりの跡が残る小割りされた木材。これをそろばんの枠として使える高さや厚みに

関西の名工

Master Craftsman of Kansai

播州小野そろばん職人

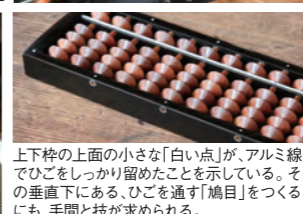
高山辰則さん



1974年、茨木市生まれ。親の転勤に伴い、東京、兵庫と転居。中高校時代を加西市で暮らし、高校は小野高校に通う。大学卒業後、IT企業のプロデューサーとして活躍。2014年、播州そろばんの第一人者宮本一廣氏に参入。組み立ての職人として精進しながら、播州そろばんを絶やさないために、今後は玉削りも覚えていきたい。播州算盤製造組合 理事長。



五の玉の玉入れが済んだら中棧にはめひごをコンコンと打ち込んで組み立てていく。この後、一の玉の玉入れをして、枠をはめた後もさらに作業は続く。



上下枠の上面の小さな「白い点」が、アルミ線でひごをしっかりと留めたことを示している。その垂直下にある、ひごを通す「鳩目」をつくるにも、手間と技が求められる。



いちばん神経を使うのは「玉の動きの調整」だと高山さん。ひごを磨きながら、あるいは組み上がったからも、玉の動きを随時調整する。玉仕上げが済んだ玉の穴を、微妙に削って修正することもある。



枠がまっすぐ均等に仕上がっているか、しっかり確認する。そろばん職人は通常、100丁を10日で仕上げることが多い。ただし、細工の凝ったそろばんなどは、20日〜1ヶ月かかる。



機能美が光る播州そろばん。写真上の黄色い玉は、ツゲ玉。写真下の茶色い玉は、カバ玉。正式にはオノオレカンバ。弁が光るくらい硬い木でつくられた玉。枠には、高級品として黒檀や縞黒檀などが使われるほか、積層強化木も使われる。



播州小野算盤工房「shin」
小野市天神町1113 宮本様方
TEL 080-4218-5208
<https://tkymtatz.wixsite.com/abacus>

玉がすつと動いて、ぴたっと止まる。 そんなそろばんをめざしています。



玉が入った箱のなかで、ザーザーと音を立てるように枠を動かすと見事に4玉以上の玉が入る「玉入れ」。指ですすくと余分な玉をはじくと、きれいに4玉ずつ揃う。高山さんは播州そろばんを紹介する工芸展などのイベントにしばしば出席する。その際、ユーザーに玉入れを体験してもらうことがあるが、「これまで何百人に体験してもらって4玉以上揃っていった方はいないです」。それでも、職人にとって玉入れは簡単な部類の工程。

削り揃えることからスタート。さらにひごをさし込む穴を桁数に合わせて開け、上下の枠と左右の枠がしっかりと組み合うように加工。ガラガラとしてグレーがかっていた木材は、何度も何度も磨くことで、ツルツルピカッと黒光りする枠に変身をとげていく。

ひごも、玉の穴に合わせて1本ずつ径の太さを調整し、スチールウールや紙やすりで磨き、ニス塗り、長さを切って…という手間を経て、そろばんのパーツとして使用できる状態になる。

そろばんの上下の枠に5つもしくは7つずつ(数はそろばんによる)ある小さな「白い点」にも注目してほしい。これは、枠の穴に打ち込んだひごを、さらに枠の上から垂直にアルミ線(白色)でしっかりと固定した証し。「ひごを貫通するように穴を開け、手で1本1本アルミ線を入れ、はさみで切って、金槌で叩いて、磨いてひごを留めています」。この小さな白い点ひとつに、なんと手間がかかっているのだろう。こうした細やかな作業が、100工程以上もあるという。

計算道具を超えたそろばんの可能性

「だから、そろばんづくりは時間を使わないとできないんですよ」と高山さん。それにしてもタイパが優先される時代。どこかの工程をうまく省くことは考えないのだろうか。「うーん、そうするとそろばん自体の仕上がりに問題が出てきてしまいます。実際、ほかで購入したそろばんについて、「玉をはじいたときに戻ってきたり、ひとつの玉を動かした振動でほかの玉が動いて困る」などの相談を受けることがある。「そういうそろばんを見ると、ここの手を抜いているなというのがわかります」

「そろばんは、玉がすつと軽く動いて、ぴたっと吸いつくように止まる。それがいちばん肝心です。すべての工程をおろそかにしないのは、すつと動いて、ぴたっと止まるそろばんをつくるためです」

高山さんは、2014年、IT企業のプロデューサーから転身し、そろばん職人の道に入った。「小野市のそろばん職人の後継者募集の記事を見たのがきっかけです。小さな頃、そろばんを習っていたこともあり、小野から伝統工芸が消えてしまいうんじゃないかと応募しました。弟子入りした先が、伝統工芸士で名人ともいわれた、宮本一廣さん。「わからんことがあったら聞けよ」と常に声をかけてくれる、面倒見のいい師匠だった。一昨年、宮本さんが鬼籍に入られるまでの9年間、ひとつひとつの工程を丁寧に教えてもらった。「修行が足りないなんてなかったです。工程を経るごとに、そろばんが仕上がっていくのがおもしろくて」

現在の小野市のそろばんづくりの従事者は、玉削りの職人が2人、玉仕上げが1人、ひごづくりが2人、組み立て職人が7人ほどとかなり危機的。そんななか、電卓があるのだからそろばんは必要ない、という意見もある。しかし、IT企業出身の高山さんはこう考える。「確かに計算する道具としては、電卓やコンピュータを使えばいいと思います。でも、100+10=110を10+10=20と押しまちがえた時、表示された20を見て「おかしい」と気づく基礎力は必要ですよ。もっと複雑なコンピュータの計算結果がでたときも同様です。「あれっ?」と気づく「人の力」があってこそITです」「8を足すには2を落として10を入れると瞬間的に考えて手を動かし、集中力も養えるそろばんは、そういう「人の力」を育むのに最適だと思えます。そろばんには、単なる計算道具を超えた可能性があると考えています」

師匠の教えは「一人でも多くの人に使いやすいたいって思ってもらえるそろばんをつくれだ。」「人の力を育むツールとして、そろばんをもっと広めていきたい。そのためには、使う人の身になって、本当に使いやすいそろばんをつくっていかねければと思っています」